

# 家持の「鬱結」と中国文学（上）

曹そう

元げん  
春しゅん

はじめに

『万葉集』の題詞には、「鬱結」という語の使用が四例見られる。そのうち山上憶良の一例を除き、他は皆、大伴家持が自らの心理状態を表す為に用いたものである。家持による「鬱結」という語の用い方、及び家持のそれが、漢詩文におけるものと同様であったかは、興味深い点と言える。従来の日中両国での研究において、漢詩文に見られる「鬱結」の用例に対する具体的な考察が皆無であったことから、この点は明らかにされる必要があるかと思われる。

本稿ではまず「鬱結」という語が用い始められた戦国時代末期から梁代りやうだいまでの漢詩文、即ち家持の読書範囲内にあった漢籍において、「鬱結」の用法を確認する。そして次回の稿で、家持の用いた「鬱結」という語の出典、及びその用法について、具体的に考察することを旨とする。

## 一 漢詩文における「鬱結」

漢語の「鬱結」には、三つの意味がある。それは、①心がむすぶれてむしゃくしゃすること、②気が塞がって伸びないさま、③「瘤のようにふくれあがっているさま」、あるいは「木の文理が曲がりくねっているさま」である。

①の用例は多く、戦国時代から現代にかけて用いられ、②と③の用例は極めて少ない。最も古いのが②の用例で、『莊子・外篇・在宥』にその例が見られる。

雲將曰、天氣不和、地氣鬱結、六氣不調、四時不節。

雲將曰はく、「天氣和せず、地氣鬱結す。六氣調はず、四時節あらず」。

文中の「鬱結」は、地気が塞がって伸びない様子を表している。③の用例は、前漢の辞賦の作家である枚乗の「七發」に見える。「七發」は枚乗の代表的な作品で、『藝文類聚』巻八十八・木部上「桐」の項に所収されている。

龍門之桐、高百尺而無枝、中鬱結之輪菌、根扶疏以分離。

龍門の桐、高さ百尺にして枝無し。中に輪菌は鬱結し、根は扶疏し以て分離す。

李善の注に「鬱結、隆高之兒也（鬱結は隆高するのさまなり）」とあるが、後の呂向の注に「鬱結輪菌、文理鬱盤曲委貌（鬱結輪菌は紋理の鬱盤、曲委するさま）」とあって、枚乗の「鬱結」は木の文理の曲がりくねるさまを表すという。

①の心理状態を表す「鬱結」の用例は、遑れば『楚辞』の屈原の作品に行き着く。中国の詩人・文人で「鬱結」の語を三回も用いたのは屈原だけである。偶然であるが、この点においては、家持は屈原と共通している。

屈原（前三四〇～前二七八）は、中国の文学史上の「最初」の大詩人である。「最初」というのは、屈原の『楚辞』が世に現れるまでは、殆どの詩が無名の詩人によるもので、屈原の作品こそが、個人の創作として初めてのものであったからである。屈原は自身が

置かれた不幸の境遇により、人間の感情を強く表す詩の様式、表現、詩語を生み出した。「鬱結」はそんな心理状態を表す用語として、屈原によって使用が始まった。では「鬱結」がどのように屈原作品の中で用いられたのかを、以下に見ていくことにする。

① 背膺<sup>よう</sup>脾<sup>ひ</sup>以交痛<sup>くわう</sup>兮 背<sup>へい</sup>と膺<sup>よう</sup>と脾<sup>ひ</sup>かれて以て交々<sup>くわく</sup>痛み

心鬱結<sup>うつけつ</sup>而紆軫<sup>うしん</sup> 心鬱結<sup>うつけつ</sup>として紆軫<sup>うしん</sup>す (九章「惜誦」)

背と胸とが分かれ裂けて、代わるがわる痛むような苦しみを覚え、心はふさがり結ばれて、もだえ痛むのである。

「惜誦」は、屈原が讒害を被り、失脚した後の作品である。屈原は、姓は半で、楚の武王の熊通の息子である屈原の後嗣である。文才に恵まれたばかりでなく、有能な政治家・外交家でもあり、楚の国を強大にするという強い信念を持った。しかしその才能を嫉妬する政敵の計略により、楚の懷王に退けられてしまう。己の身を忘れるほど主君に尽くしていたのに、今は主君に近づくことすらできない。主君を離れて遠くへ行こうと思っているが、屈原は主君を懐い、国を憂えて進退窮し、心中煩悶するのであった。以上の二句には、「鬱結」という語によって表された屈原の憤懣、そしてそれに矛盾する心情を見ることができる。

② 遭沈濁<sup>しんじやく</sup>而汙穢<sup>おふたい</sup>兮 沈濁<sup>しんじやく</sup>にして汙穢<sup>おふたい</sup>なるに遭ひて

獨鬱結<sup>うつけつ</sup>其誰<sup>たれ</sup>語<sup>かた</sup>らん (遠遊)

深く濁って汚れた世に遭い、独り気はふさがり結ばれて、一体誰に心のうちをかたろうか。

「遠遊」は、屈原が放逐された後の作品である。この二句は、屈原が抱いた世の中の不正・不合理に対する憎み怒り、そして自身が周囲の人から理解されないという悲痛な心情を表している。

③ 鬱結<sup>うつけつ</sup>紆軫<sup>うしん</sup>兮 鬱結<sup>うつけつ</sup>として紆軫<sup>うしん</sup>して

家持の「鬱結」と中国文学（上）

離慙而長鞠 慙うれひに離わかりて長く鞠きはまらんとす

撫情効志兮 情を撫ふし志を効いたさんとするも

冤屈而自抑 冤屈して自ら抑ふ

(「九章」懷沙)

私は心がふさいで鬱々としてむすばれ、もつれて痛み、このうれいにかかったままで、苦しみの果てる時が来るであろうか。ふさがりもつれるわが心をなだめかし、強いておちつけようとする。

「懷沙」は、二度目の放逐、即ち、懷王の息子の頃襄王に放逐された屈原が死を覚悟し、それを決行する前の作品である。「鬱結」、「紆軫」、「離慙」、「冤屈」のような激しい感情を表す詩語は、いずれも屈原によつて使い始められたものであり、当時の悲しみと憤りの窮まる心情を的確に表している。

屈原の次に「鬱結」を用いたのは、前漢の武帝時代の司馬遷(前一四五―前八六)である。李陵の禍にあつて腐刑に処せられた司馬遷だが、後に中書令となり、再び尊寵されるようになっていた。ある時、司馬遷は、益州の刺史であつた任安から手紙を受け取った。それは賢人を推薦するようと責めたてたものであつた。その返事として書いたのが「報任安卿書」である。自分は刑餘の臣であり、賢人の推薦などすべき立場ではない、今はただ著書を以て不朽の名を求めるだけだと、司馬遷は心中を打ち明け語った。その「報任安卿書」には、以下のような一節がある。

古者富貴而名磨滅、不可勝紀。唯倜儻非常之人稱焉。蓋文王拘而演周易、仲尼厄而作春秋、屈原放逐、乃賦離騷、左丘失明、厥有國語、孫子臙脚、兵法修列、不韋遷蜀、世傳呂覽、韓非囚秦、說難孤憤。詩三百篇、大底賢聖發憤之所爲作也。此人皆意有所鬱結、不得通其道。故述往事、思來者。

古いにしへは富貴にして名の磨滅する、勝あげて紀す可からず。唯倜儻非常の人のみ稱せらる。蓋けだし文王は拘はれて周易を演のべ、仲尼ちうには厄せられて春秋を作り、屈原は放逐せられて、乃すなはち離騷を賦し、左丘さきうは明を失ひて、厥それ國語あり、孫子そんしは臙脚せられて、兵法修列し、不韋は蜀に遷されて、世に呂覽を傳へ、韓非は秦に囚はれて、說難・孤憤あり。詩三百篇は、大底賢聖發憤

の爲に作りし所なり。此の人皆意に鬱結<sup>うっけつ</sup>する所有りて、其の道を通ずるを得ず。故に往事を述べ、來者を思へるのみ。

内容は次のようである。昔から富貴の身でありながら、死んで名が磨滅してしまった例など、一々数え上げて記すことができないほどたくさんある。ただ常人を超えた卓偉の人だけが、後世に亘って称賛される。思えば、昔、文王は羑里に囚われて周易を敷衍し、孔子は陳蔡の災難に遭って春秋を作り、屈原は国を放逐された為に離騷を賦し、左丘は盲人になつてはじめて国語を著し、足を切られた孫臧によつて兵法が整備されることとなり、呂不韋が蜀に遷されて世に呂覽を伝え、韓非は秦に囚えられて説難、孤憤の文を作つた。また詩経三百篇は概ね、聖賢が時世に発憤して作つたものである。このような人々は皆心に鬱結したものを有し、その道を行ひ達することができない為に、往事を述べて未來の人に己の志を見しめたのだ、と。

古代の聖賢たちと同様に、司馬遷は「鬱結」する心を晴らす為に発憤して『史記』を著した。屈原から受け継いだ「鬱結」という表現によつて、ここで司馬遷は自身を古代の不遇な聖賢たちと結び付けたのである。

漢代に見られる「鬱結」の用例は、上記の司馬遷の「報任安卿書」における「鬱結」の他、もう一例確認することができる。それは『後漢書』に見られる以下のようなものである。

民愁鬱結、起入賊党、官輒興兵、誅討其罪。

民愁ひて鬱結<sup>うっけつ</sup>し、起ちて賊党に入る。官輒<sup>すなは</sup>ち兵を興し、其の罪を誅討す。

文中の「鬱結」は、官に虐げられた民衆の鬱屈した心情を表している。

漢代が終わり、中国史上に本格的な文学の時代が到来した。それは建安時代である。その文壇を代表する詩人である徐幹、應瑒、曹丕、曹植の作品には皆、「鬱結」の語が見られる。ところでこの「鬱結」という語の用い方であるが、各詩人によつて特徴があった。まずは徐幹の詩から見てみよう。

徐幹（一七〇～二一七）は、建安七子の一人で詩賦に長じ、曹丕、曹植の両者も彼の才能を高く評価した。「室思一首」詩（『玉台新

詠』巻一に所収）は徐幹の傑作である。全体は六章で構成され、一章は十句の五言詩からなっている。「鬱結」は次の第二章に用いられている。

峨峨高山首	峨峨 <sup>がが</sup> たり高山 <sup>しやう</sup> の首
悠悠萬里道	悠悠 <sup>ういう</sup> たり萬里 <sup>り</sup> の道
君去日已遠	君去つて日に已 <sup>すで</sup> に遠し
鬱結令人老	鬱結 <sup>うつけつ</sup> 人をして老いしむ
人生一世間	人生一世の間
忽若暮春草	忽 <sup>こつ</sup> として暮春の草の若し
時不可再得	時は再び得 <sup>え</sup> べからず
何爲自愁惱	何爲 <sup>す</sup> れぞ自ら愁惱する
每誦昔鴻恩	毎 <sup>つね</sup> に昔の鴻恩を誦す
賤軀焉足保	賤軀 <sup>いづく</sup> 焉んぞ保つに足らん

詩題の「室思」からも分かるように、この詩は婦人の閨情を詠じたものである。詩の前半の四句は、留守居の「思婦」が高い山の頂上に登り、主人が遠くへと旅立つて行った道を眺め、長い離別で心がふさがり、ふけまざったと嘆くその姿を詠む。後半の六句は、まづ暮春の草を借りて人生と青春のはかなさを喩える。そして二度と来ない現在を楽しみ、愁いや悩みの心を晴らそうと、また昔日の睦まじい夫婦の仲を思い起こし、寂しさに耐えようとする、「思婦」の決意を描写する。この詩の「鬱結」は、「思婦」の哀傷の気持ちを言い表すものであった。

徐幹と同じく建安七子の一人である應瑒は、「公燕詩」という作品の中で、次のように「鬱結」を用いている。

辯論釋鬱結 辯論し鬱結を釋うつけつきて

援筆興文章 援筆し文章を興す

この詩は、『藝文類聚』卷三十九と『初學記』卷十四に収められている。詩題の「公燕詩」は、『藝文類聚』では「公宴詩」となっている。「公燕詩」即ち「公宴詩」とは、臣下が帝王と公卿の宴に陪し、その際に詠じた詩のことを言う。『懷風藻』の侍宴詩は、中国の「公宴詩」と同じジャンルである。

「公燕詩」の作者である應瑒（一七七―二一七）は、後漢末期の政治家・文人である。應瑒のこの詩は十句からなる五言詩である。前半の四句では、宴の主催者の人徳を讃え、四方から招かれた「君子」が宴席に集まる盛大な場面を描く。先に引用した詩句はこれに続く第五、第六句で、対句の形を取る。詩意は、「君子」たちは互いに論じ合って、「鬱結」する心を晴らしたり、筆を取って詩賦を詠じたりする、というものである。ところで心が「鬱結」する理由についてであるが、ここでは特に説明は無く、詩の内容からも推測できない。一般的には、身を官界に置く官人、或いはより広く世間一般の人々が抱えた、様々な悩みを指すものと解釈されている。しかしこの詩における「鬱結」は、應瑒がかつて経験した世の中の辛酸に関わるもので、詩人の不幸な過去の境遇と関連を持っているのではないかと想像される。

應瑒は豫州汝南郡（今の河南省項城市）の出身で、代々、読書人の家柄に生まれた。祖父と伯父は共に漢の儒者で、著述で名高い人物であった。應瑒と弟の應璩もまた優秀で、「汝南才子」と称されるほどであった。しかし後漢末期の混乱の時代、應瑒は自身の才能を発揮する機会に恵まれずにいた。曹丕に出会う前の應瑒は、実に不本意な人生を送っていた。その当時の悲惨な遭遇は、曹丕に献じた「侍五官中郎將建章臺集詩」から窺い知ることができる。その後、應瑒は曹丕から曹操に推薦され、丞相掾属に任ぜられた。そして五官中郎將文学の地位にまで上り詰める。

出世する前の應瑒は、幾度となく「鬱結」する気持ちを味わっていたであろう。そして誰かとしきりに話すことで、その「鬱結」した心を晴らそうとしていたと思われる。上述の「辯論釋鬱結」の詩句は、そういった自らの体験からごく自然に口ずさまれたのではなからうか。

應場の文才を高く評価した曹丕は、自らの「出婦賦」という作品の中で、「鬱結」を用いている。次に、『藝文類聚』卷三十「別下」の項に所収された曹丕の「出婦賦」を見てみよう。

思在昔之恩好

在昔の恩好を思へば

似比翼之相親

比翼の相ひ親しむに似たり

惟方今之疏絶

方今の疏絶を惟へば

若驚風之吹塵

驚風の塵を吹くが若し

夫色衰而愛絶

夫れ色衰へて愛絶つ

信古今其有之

信に古今其れ之れ有り

傷榮獨之無恃

榮獨の恃む無きを傷み

恨胤嗣之不滋

胤嗣の滋ざるを恨む

甘没身而同穴

甘んじて身を没するまで穴を同じうし

終百年之長期

百年の長期を終へんとす

信無子而應出

信に子無くして應に出さるべきは

自典禮之常度

自ら典禮の常度

悲谷風之不答

「谷風」の答えざるを悲しみ

怨昔人之忽故

昔人の忽ち故るを怨む

被入門之初服

入門の初服を被ひ

出登車而就路

登車を出して路に就く

遵長塗而南邁

長塗に遵ひて南へ邁く

馬躊躇而廻顧

馬躊躇して廻りて顧みる。



野鳥翻而高飛

野鳥翻<sup>か</sup>けて高く飛び

愴哀鳴而相慕

愴哀鳴きて相ひ慕ふ

撫駢服而展節

駢服を撫して節を展べ

即臨沂之舊城

臨沂の舊城に即く

踐麋鹿之曲蹊

麋鹿の曲蹊を踐<sup>ふ</sup>み

聽百鳥之群鳴

百鳥の群鳴を聽きて

情悵悵而顧望

情悵悵して顧望し

心鬱結其不平

心鬱結<sup>うつけつ</sup>して其れ平らかならず

詩意は次のようである。昔日、夫と仲睦まじく、比翼の鳥のように相思相愛していた。今、自分は夫と疎遠になり、関係が断絶して、驚いた風に吹き飛ばされた塵のように捨てられたのである。女性の容貌は衰えたら、夫婦の愛が薄くなっていく。これは古今を問わずよくあることを知っている。悲しいのは、私は独りぼっちで、頼りにする人もいない。夫との間に子供が生まれなかったことを恨んでいる。夫と同じ墓に入り、夫婦の一生の連れ添いの生活を円満にしようと思った。嗣子を産まなかったので出だされるのは礼義の常に変わらない法則であると知っている。しかし、悲しいのは激怒した夫は一言も応えてくれなかった。憎たらしいのは、昔、仲睦まじい夫は、突然、気持ち<sup>きもち</sup>が他に移ってしまった。結婚する当時の式服を着て家を出、馬車に乗って旅に出た。遙々遠い道路に沿って南へ向かう。馬は徘徊して振り返っており、空を高く翔けて飛ぶ野鳥は哀しく鳴いたりして相ひ慕うように聞こえる。馬は力を奮って馬車を引っ張って、もうすぐ臨沂の旧い城に着く。麋鹿の走りの曲がりくねっている小道を通して、鳴き交っている百鳥の鳴き声を聞いている。私は悲しみにふさぎ込んだり、恨んだりして、振り返って見渡す。自分の気持ちはその不平によって鬱々として結ばれている。

賦の題目の「出婦」は家を出された女、即ち「棄婦」のことである。この「出婦」には実在のモデルがあり、平虜將軍劉勳の妻王宋を指す。また曹丕はこの「出婦賦」の他に、王宋の不幸な境遇を憐れむ詩を二首詠じている。その「魏文帝代劉勳出妻王氏詩」の序は、以下のようである。

王宋者平虜將軍劉勳妻也。入門二十餘年、後勳悅山陽司馬氏女、以宋無子出之。

王宋は平虜將軍劉勳が妻なり。門に入つて二十餘年、後勳は山陽司馬氏の女を悦び、宋に子無きを以て之を出だす。

王宋は平虜將軍劉勳と結婚して、二十数年もの年月を經ていた。しかし司馬氏の娘に心を奪われた劉勳は、妻の王宋に子が無いことを理由に、王宋を家から追い出した。曹丕はこの哀れな女性に成り代わり、一人称で「出婦賦」を詠じた。作品には「棄婦」を憐れむ曹丕の真情が現れている。

徐幹の「室思一首」の「鬱結」が「思婦」の哀傷の心情によるものであったのに対し、曹丕の「出婦賦」の「鬱結」は、自分を捨てた夫に対する「棄婦」の惆悵、怨恨によるものであった。両者は「鬱結」は、質も程度も大きく異なる。

建安詩壇の中心人物として活躍した曹丕は、旅人の情や思婦、棄婦の情を詠じた詩賦に長じた。そしてこの「出婦賦」にはその特色を存分に發揮している。

曹丕の弟の曹植の作品にも、「鬱結」の一例が見られる。曹植は文才に恵まれ、兄と同様、建安時代の詩壇を代表する詩人であったが、彼は文学に造脂が深いばかりではなく、経国の大志も持っていた。十四歳の頃から父親に従つて戦場を疾駆し、遠征と戦の中で青春時代を過ごした。曹植は「與楊徳祖書」(『文選』卷四十二・書中)で、自らが持つ遠大な抱負を次のように述べている。

猶庶幾戮力上國、流惠下民、建永世之業、流石之功。

猶ほ庶幾くは力を上國に戮せ、恵みを下民に流し、永世の業を建て、金石の功を流さん。

この文の意は、私は国の為に力をあわせ、百姓に恩恵を与え、後の世につながる業績を打ち立てること、その功績を金石に刻みつけられるようになりたいのである。しかし曹植の大志は父親曹操の死により、実現できなかつた。曹操、曹丕親子の曹植に対する迫害と圧迫は、彼が持った政治的な抱負、優れた才能を埋没させてしまったのである。『魏志・陳王傳』に

太和元年、徙封浚儀。二年、復還雍丘。植常自憤怒、抱利器而無所施、上疏求自試。

太和元年、浚儀に徙封し、二年、復た雍丘に還す。植、常に自ら憤怒し、利器を抱きて施す所無く、上疏して自試を求む。

とある。太和元年（二二七）、曹植は浚儀に移住させられ、太和二年にはまた雍丘に戻されていた。自身への処遇を常に憤り、且つ恨んでいた曹植は、すぐれた才能を持っているにも関わらず、それを發揮する場所が無かった。そこで魏明帝に上疏し、自身が試されることを求めたのである。太和二年（二二八）、「求自試表」を作り、魏明帝（曹丕の息子・曹叡）に献上した。その「求自試表」では、次のように述べている。

此二臣者、豈好爲誇主而曜世俗哉？ 志或鬱結、欲逞其才力、輪能於明君也。

此の二臣は豈好みて主に誇りて世俗に曜やかせんや？ 志或いは鬱結し、其の才力を逞しくし、明君に能を輪せしめんと欲するなり。

文中の「此二臣」は、漢文帝時代の政治家・文章家の賈誼、そして漢武帝時代の政治家の終軍を指す。両者は共に若くして国と民衆の為に尽力し、世間の人々を驚かすほどの輝かしい業績を打ち立てた。「此の二臣は豈好みて主に誇りて、世俗に曜やかせんや」は、賈誼と終軍は決して皇帝に自身の功をひけらかしたり、世の人々に見せびらかしたりする為に、わざと本領を發揮したのではない、という意味である。「志或いは鬱結し、其の才力を逞しくし、明君に能を輪せしめんと欲するなり」では、賈誼と終軍が政治に臨んだその姿勢に託して、曹植自身の意気込みを述べる。国の為に、自らが持つ全知力を賢明な君主に捧げたいというその真心を甥の曹叡に示した曹植。しかし曹叡に遠ざけられ、地方を転々とさせられ、曹植はその生涯を終える。

曹植の「志或鬱結」は、彼の「植、常に自ら憤怒し、利器を抱きて施す所無し」という心情によるものであった。

建安時代の次は正始時代で、この時代に活躍したのは、竹林の七賢である。嵇康（二二四～二六二）は、竹林の七賢の代表的な人物で、博識でとりわけ老莊思想を好んだ。その死の直前の作「幽憤詩」には、「嗟余薄祜にして、少うして不造に遭ひ／哀榮にして識靡く、越に襁褓に在り／母兄鞠育し、慈有りて威無し」とある。嵇康は幼い時に父を失った。しかし嵇康は母と兄から多大な慈愛

を受けて育った。母と兄は嵇康にとって、最も大切な存在であったのである。嵇康の「思親詩」(『文選』卷十五に所収)には、

奈何愁兮愁無聊

奈何に愁ひて愁ひ無聊なり

恒惻惻兮心如抽

恒に惻惻たり心抽けたるが如し

愁奈何兮悲思多

愁ひて奈何に悲思多し

情鬱結兮不可化

情鬱結して化す可からず

奄失恃兮孤榮榮

奄ち恃を失ひて孤り榮榮たり

思報德兮邈已絶

報德することを思ひ邈かに已に絶つ

感鞠育兮情剥裂

鞠育を感じて情剥裂す

嗟母兄兮永潜藏

嗟、母、兄 永く潜藏し

想形容兮内摧傷

形容を想ひて内摧き傷む

とある。この詩の形式は楚辞と同様で、一句は七言で、三十句からなる。ここに引用したのは、詩の前半の八句である。詩意は、こんなにも愁え、どうしようもなく気が晴れない。常に悲しんで、心は裂けるほどに痛い。懐かしんでは、愁えている。気がふさがって、鬱々としたこの心を晴らすことはできない。母親を突然失い、この身は独りぼっちとなってしまった。恩返ししたくとも母はすでに遠くへと行ってしまい、どうすることもできない。長く養い育てくれた母への恩を思い、心は引き裂けるように痛い。ああ、母と兄は永遠に行ってしまった。その容貌を思い出して、心は悲しみ痛む、というものである。

嵇康の場合、母と兄の死による悲痛、恩返しができない悔恨の気持ちをも、「鬱結」という語によって表現したのである。

『竹林の七賢』が活躍した時代は終わり、司馬氏の樹立した晋の時代が到来した。西晋と東晋は、文学の人材が次々と現れる時代であった。潘岳は西晋を代表する詩人である。感傷的な作風が持ち味で、中でも人の死を追悼する作品に優れた。この事は恐らく、潘岳の個人的経験と関係すると思われる。潘岳は「懷舊賦」と「寡婦賦」の二作品で、「鬱結」を用いている。まずは「懷舊賦」の中にそ

の用例を見てみよう。

余總角而獲見、承戴侯之清塵。名余以國士、眷余以嘉姻。自祖考而隆好、逮二子而世親。歎攜手以偕老、庶報德之有鄰。今九載而一來、空館闐其無人。陳蓼被于堂除、舊圃化而爲薪。步庭廡以徘徊、涕泣流而霑巾。宵展轉而不寐、驟長歎以達晨。獨鬱結其誰語、聊綴思於斯文。

余總角にして見ゆるを獲、戴侯の清塵を承く。余に名くるに國士を以てし、余を眷みるに嘉姻を以てす。祖考よりして好を隆んにし、二子に逮びて世々親しむ。手を携へて以て偕に老ゆるを歎び、德に報ゆるの鄰有るを庶ふ。今九載にして一たび來れば、空館闐として其れ人無し。陳蓼堂除を被ひ、舊圃化して薪と爲る。庭廡を歩みて以て徘徊し、涕泣流して巾を霑す。宵展轉として寐ねず、驟々長歎して以て晨に達す。獨り鬱結して其れ誰にか語らん、聊か思ひを斯の文に綴る。

この文の意は、以下のようである。私は幼少年の頃に東武侯にお目にかかり、その立派な人品に感銘を受けた。侯は、私を国士と呼んでくださり、婚姻のよしみを結んでくださった。我が家と東武侯の家は、祖父の時より深くおつきあいをし、道元・公嗣の代に至るまで、代々親しくしていただいた。手を携え合つて、ともに老いを迎えるのを楽しみにしていたし、受けた御恩に報いる時もあるだろうと思つていた。今、九年ぶりにやつて来ると、その旧居はからっぽで人影もない。階段には古い草の根がはびこり、園の木々は薪にされてしまつていた。中庭の軒端を巡つてさまよえば、涙は流れ落ちて、手巾を濡らす。夜になつても、寝返りを打つばかりで寝られず、歎息を繰り返して朝を迎えた。心は悲しみに満たされ、誰に告げようもない。聊かこの文を記し、思いを綴つたのである、と。

文中の「鬱結」は、潘岳の親しい人に対する哀傷の気持ちによるものである。その「獨鬱結其誰語」は、『楚辭』(遠遊)の「獨鬱結其誰語」の句を用いていたと指摘されている。

潘岳によるもう一つの「鬱結」は、哀傷をテーマとする「寡婦賦」の結末部分の一節にある。

墓門兮肅肅、脩壟兮峨峨。孤鳥嚶兮悲鳴、長松萋兮振柯。哀鬱結兮交集、淚橫流兮滂沱。

墓門しゆくしゆく肅肅として、脩壟しゆくしゆく峨峨ががたり。孤鳥かう嚶おうとして悲しみ鳴き、長松ちやうそう萋せいとして柯えだを振るふ。哀しみ鬱結うつけつして交集し、淚なみだ横流し滂ぼう沱たたり。

この六句では、主人公の未亡人が山の隈に登り、見たり聞いたり、また感じたりしたことが、以下のように述べられている。「山の隈には厳かな墓の門があり、高い盛り土の墓（ご主人の墓）がそびえる。孤独な鳥が悲しげに鳴き、高い松が枝を茂らせている。私は悲しみて気がふさがりもつれ、涙が溢れてこぼれ落ちる」と。

「寡婦賦」は、潘岳が未亡人の身になって、即ち一人称で、友人の任護の未亡人の心情を述べたものである。序文によれば、親友の任護は二十歳の若さで亡くなり、その未亡人は潘岳の妻の姉妹であった。彼女は若くして父母を失い、今は夫とも死別してしまった。幼い娘を抱え、この世の最大な苦しみ、悲しみに耐えている彼女の心情を、潘岳は「鬱結」という語で描き出したのである。

潘岳の「懷舊賦」、「寡婦賦」における「鬱結」の用法はほぼ同じ、どちらも悲痛、哀傷の心情によるものと言える。

次に東晋の文人、孫綽の「鬱結」の用法を見てみよう。孫綽は東晋の文学者で、官は廷尉卿から著作左郎に進んだ。文才に恵まれ、老荘の気風を説く「玄言詩」の代表的な詩人である。また詩に止まらず、賦の名手としても知られた。

孫綽には「蘭亭詩二首」があり、「三日蘭亭詩序」という五十句からなる長い序文が付けられている。『藝文類聚』巻四・歲時中「三月三日」の項に所収されたその詩序の一部を、以下に引用する。

情因所習而遷移	情は習ふ所に因りて遷移し
物触所遇而興感	物は遇ふ所に触れて興感す
故振轡於朝市	故に轡 <small>たうな</small> を朝市に振 <small>むす</small> べば
則充屈之心生	則ち充屈の心は生じ
閑歩於林野	歩みを林野に閑 <small>しづ</small> かにすれば
則遼落之志興	則ち遼落の志は興 <small>おこ</small> る

文意であるが、人間は学ぶことによって考えが変わる。物に触れることによって、感動して興を起こす。それ故に身を官界に置けば、鬱屈する思いが生じ、林や野をぶらつく、俗世間を遠く避けようとする気を生じる、と。

文中の「充屈」の意味について『漢語大詞典』<sup>①</sup>によれば、

鬱結貌。《文選・馬融〈長笛賦〉》：『充屈鬱律、曠菌礧快。』呂延濟注：『皆聲鬱結不散貌。』

鬱結するさまなり。『文選』馬融の「長笛賦」に「充屈鬱律にして、曠菌礧快なり。」呂延濟の注に「皆、聲鬱結し、散らぬさまなり。」

とある。即ち「充屈」は、「鬱結」と同じ意味だと言える。孫綽はまた、人が鬱結する気持ちを生させるその原因だけでなく、そういった心のうさを晴らす方法についても「三日蘭亭詩序」では論じている。

屢借山水　屢<sup>しば</sup>しば山水を借りて

以化其鬱結　以て其の鬱結<sup>うっけつ</sup>を化せん

名誉や地位を争う俗世間から遠く離れ、思うままに振る舞うというのは、老荘の思想に基づく考えである。孫綽は社会や身近な生活など、個人的、具体的な諸問題に関心を示すことを極力避けるべきだと主張する。俗世間で生きるなら当然、様々な煩悶が生じる。その「鬱結」した心情を晴らすとするなら、俗世間を遠く離れなければならないという哲理である。

最後に、梁の豫章王蕭綜の作品である「聽鐘鳴」について、そこでの「鬱結」の用法を見ていくことにする。まずは梁の豫章王蕭綜の人物像について概観しておく。

蕭綜は、南朝梁の初代の皇帝蕭衍の淑媛呉氏の子として生まれた。母の呉淑媛はもと南朝齊の第六代の皇帝蕭宝卷の寵妃であり、五〇一年十二月に蕭衍が健康を占領したときに略取された。その為、翌年七月に蕭綜を産んだことで、蕭綜は実は南朝齊の皇帝の蕭宝

卷の子ではないかと噂された。成長した蕭綜はこれらの事を自認し、武帝蕭衍に対する隔意を抱き、梁王朝と武帝蕭衍を恨んだ。それは幾度となく梁を離れようとする試みにもつながる。そして五二五年の秋、終に北魏の都洛陽へと亡命した。その後、蕭綜は北魏に高平郡開国公・丹陽王に封じられた。

さて『洛陽伽藍記』という書物には、以下のような記述がある。洛陽城の東の建陽里に土台があり、高さは三丈で、上には精舎が二軒建てられていた。精舎には鐘が取り付けられ、その鐘の音は五十里まで響き渡ったという。北魏に來た蕭綜は、この鐘の音を聞いて「聽鐘鳴」の詩を詠じた。詩は『藝文類聚』卷三十・人部十四「怨」の項に所収されている。

歷歷聽鐘鳴 歷歷たり 鐘の鳴るを聽き

當知在帝城 當に知るべし 帝城に在るを

西樹隱落月 西樹 落月を隱し

東牕見曉星 東牕 曉星を見る

霧露肫肫未分明 霧露肫肫たり 未だに分明せず

烏啼啞啞已流聲 烏啼啞啞として 已に聲を流す

驚客思 客思を驚かし

動客情 客情を動かし

客思鬱縱橫 客思 鬱として縱横す

翩翩孤雁何所栖 翩翩たる孤雁 何所にか栖まん

依依別鶴半夜鳴 依依たる別鶴 半夜に鳴く

今歲行已暮 今歲 行きて已に暮れ

雨雪向淒淒 雨雪 向ひて淒淒たり

飛蓬旦夕起 飛蓬 旦夕に起き



楊柳尚飜低 楊柳尚ほ飜低す

氣鬱結 うつけつ 氣鬱結し

涕滂沱 ばうだ 涕滂沱たり

愁思無所託 愁思 託す所無く

強作聽鐘歌 強ひて作す 鐘を聴くの歌

深夜、遠くから伝わってくる鐘の音により、蕭綜は自身が今、北魏の都にしていることを実感する。「鐘鳴」、「落月」、「暁星」、「霧露」、「烏啼」が、異郷にいる蕭綜に様々な思いを引き起こさせる。「客思を驚かせ／客情を動かし／客思鬱として縦横す」は、当時の詩人の、鬱々とした落ち着かない心理状態を表す。「孤雁」と「別鶴」は、それぞれ蕭綜自身と梁の都に残した妻を象徴する。「雨雪に向ひて凄凄たり」は、詩人が空想する年末の寂しい風景である。一方「飛蓬旦夕に起き／楊柳尚ほ飜低す」は実景で、風に吹かれてごろごろ転がる枯れた「飛蓬」と身の寄せ所のない「孤雁」「別鶴」に、蕭綜は自身を重ね合わせている。そして結句の「氣鬱結し／涕滂沱たり／愁思 託す所無く／強ひて作す鐘を聴くの歌」では、詩人の心の内にある哀愁、怨恨が描き出された。

蕭綜はその出生により、悲劇的な一生が決定づけられていた。その為、蕭綜の「鬱結」した心情は、怨、恨、哀、悲といった様々な感情が交錯する、複雑なものだったと言える。

## おわりに

以上、戦国時代末期から梁王朝までの漢籍について、「鬱結」の用法を考察してきた。ここまでの作業で確認したことをまとめると、以下のようになる。

まず「鬱結」という語が持つその意味合いに、人間の様々なマイナス的感情の壁を描き出すのに相応しいものがあつたと言える。その為、煩悶、不平、不満、哀傷、悲痛、怨恨のような心情を描く場合に、「鬱結」は好んで用いられた。そして「鬱結」の心の原因で

あるが、次のように分類することができる。

(一) 人為的な被害による「鬱結」

屈原・司馬遷・曹植は、政治的に対立する勢力による被害者で、『後漢書』に記された民衆は、社会的混乱や政治的腐敗に日常生活を脅かされた被害者であった。

(二) 混乱の時代と悲劇的な運命による「鬱結」

應瑒の生涯の前半は、後漢の混乱時代による不本意な人生であり、蕭綜の場合は自分で選べない出生による屈辱・悲痛を経験し、人生はそれによって翻弄された。

(三) 離別と生死による「鬱結」

徐幹と曹丕は、自身が経験した離別ではなく、*「棄婦」*、*「思婦」*といった作品の主人公の身になり、一人称で離別による悲しみ、苦しみを描いた。

嵇康と潘岳は、生死をテーマとした詩賦を吟じ、その作品の中で、親や兄弟、そして夫の死を経験した人々の「鬱結」を描き出す。

(四) 名譽・地位を争う俗世間による「鬱結」

老莊の思想に憧れた孫綽は、俗世間と密接に関われば、「鬱結」の心情を生じると主張した。

様々な原因によって生じた「鬱結」の心であるが、それをどのように晴らしたのかは、以下のように整理できる。

(一) 文学作品の創作に力を注ぐ。

屈原・司馬遷・曹植及び潘岳は、「鬱結」した心を晴らす為、持てる能力を思う存分に注ぎ、すぐれた文学作品を作り出した。

(二) 語り合ったり、弁論したりする。

屈原と潘岳は「鬱結」した気持ちを誰かに語ることが、それを晴らす手段だと考えた。しかし彼らの場合は結局、その相手を得ることはできなかった。應瑒も「鬱結」への対処については同じ立場で、宴会に集まった人々が語り合う様子を、「辯論して鬱結

を釋く」と述べている。

(三) 自然に回歸する。

孫綽は「屢しば山水を借りて／以て其の鬱結を化せん」と述べ、俗世間と離れ、自然へ向かう姿勢をとった。

(四) 体制に反発、反抗する。

『後漢書』に記された「民」は、私欲に目がくらむ官吏に虐げられ続けたことで、終には造反する道を選び、「鬱結」した心を晴らす手段とした。

#### 注

- (1) 大伴家持は初唐の漢詩文を収録した『初學記』も熟読したようであるが、初唐の漢詩文に「鬱結」の用例がないので、考察範囲は戦国時代末期から梁代までとした。
- (2) 『漢語大詞典』(第三卷下冊) 汉语大词典编辑委员会汉语大词典编纂处编纂二〇〇一年九月第二版
- (3) 『文選』第十六賦辛・志下・哀傷に所収された潘岳の「懷舊賦」の注による。
- (4) 『漢語大詞典』(第二卷上冊) 汉语大词典编辑委员会汉语大词典编纂处编纂二〇〇一年九月第二版

#### 参考文献

- 福永光司著『莊子・外篇』(朝日新聞社 一九七八年)
- 星川清孝著 全釈漢文大系『楚辭』(明治書院 平成二〇年四月二〇日)
- 内田泉之助・網裕次著 全釈漢文大系『文選』(詩篇)上(明治書院 平成一七年五月二〇日)
- 高橋忠彦著 全釈漢文大系『文選』(賦篇)下(明治書院 平成一三年九月一〇日)
- 内田泉之助著 全釈漢文大系『玉台新詠』上(明治書院 平成一九年七月二五日)
- 松浦友久編『漢詩の事典』(大修館書店 一九九九年一月一五日)

宇野直人著『漢詩の歴史』（東方書店 二〇〇五年二月二〇）

辰巳正明著『懷風藻全注釈』（笠間書院 二〇一二年九月三〇日）

〔唐〕歐陽詢撰『藝文類聚』上・下（上海古籍出版社 二〇一五年一月第五次印刷）

周啸天主編『詩經楚辭鑒賞辭典』（商務印書館 二〇一二年一月）

陳振鵬・章培恒主編『古文鑒賞辭典』（上海辭書出版社 二〇一四年七月）

袁行霈・周勛初等撰『漢魏六朝詩鑒賞辭典』（上海辭書出版社 二〇一五年一〇月）